

雲岡石窟第6窟の仏伝浮彫に表されたいわゆる「宮中歓楽図」に関する再解釈 —ガンダーラの競試武芸図との比較から

上枝いづみ（金沢大学）

中国の初期仏伝美術において、北魏時代の雲岡石窟における仏伝図の愛好は特筆される。なかでも、5世紀末頃に造営されたとみられる第6窟は、側壁と中心柱の周囲が仏伝浮彫で荘嚴され、釈迦の誕生から成道後の事績までを体系的に表す完成度の高い窟であり、中国における伝記的な仏伝表現の最古最大の例といえる。第6窟では人物像に漢民族式の服制が採用されながらも、仏伝の全体構成や表現にはガンダーラの影響が指摘される。この第6窟の仏伝図に関しては数多くの研究蓄積があるが、一部の主題同定に異説もあり、そのため窟全体の図像プログラムは未だ十分に確定しておらず、個々の図像の成立過程にも検討の余地が残される。かかる現状を踏まえ、本発表では従来「宮中歓楽」と認識されてきた東壁腰壁の一場面を図像学的検討を加え、改めて「相撲」場面に同定することで上の問題を考えたい。

当該場面は釈迦の太子時代の場面が連続する東壁腰壁に「弓技」に続いて配置される。水野清一氏による報告以来、一貫して太子時代の「宮中歓楽」を表した主題と解釈されてきた。しかし当該場面を改めて観察すれば、建物内で坐す王侯風の人物と、建物の横で組み合う二人の人物、その下方に倒れた人物とこれに水瓶の水を注ぐ様子の人物像が配され、「歓楽図」としては違和感がある。また、南石窟寺1窟（510年）に確認される「宮中歓楽」図とも異なる。近年では、安藤房枝氏が2010年に「相撲の場面を表すとの説もある」と言及している他、趙昆雨氏が2022年に著書の解説で「手搏の内容を示したものかも知れない」と述べるなど、従來說を踏襲しながらも一部疑問視する見解も現われつつある。

私見によればガンダーラの仏伝美術との比較検討によって、当該場面を「相撲」場面に同定可能である。太子時代の多彩な競試武芸の場面の創出は、インドの仏伝美術の中でもガンダーラの特色であり、「相撲」図は「弓技」や「擲象」と並び、よく知られている。管見の限りガンダーラの「相撲」図は34例が現存し、その図像は二人の競技者が地に足をつけて組み合う勝敗不明なものが主流である。しかし、スワート地方の初期作例を中心に、勝敗の明らかな競技者像に加え、倒れて背後から支えられる男性と、彼に壺の水を注ぐ男性を表す9例を確認できる。『修行本起経』、『太子瑞應本起経』の記述を参照すれば、これは昏倒した敗者に水を注ぎ蘇生させる場面とみてよい。この点、雲岡第6窟の当該場面は、ガンダーラの「相撲」図の中でも特徴的な敗者の図像が伝播して成立していることを示す。さらに、その直前の「弓技」図にも、経典には認められないガンダーラ独特の猿の補助という図像が認められることを指摘する。

以上より、雲岡第6窟東壁腰壁では「弓技」「相撲」が並び、競試武芸の場面が多彩に描かれていたことを提示し、主題構成の傾向も含めてガンダーラの図像そのものが東伝した一例として位置づける。